

『華夷訳語(甲種)』漢字音訳の基礎方言(再論)

中村雅之

1. はじめに

私は以前、明初のいわゆる甲種本『華夷訳語』におけるモンゴル語の漢字音訳が南京音を基礎としてなされたと論じたことがある(cf.中村 2007)。最近、ブルグド(布日古徳)氏が『華夷訳語』(甲種本)音訳漢字基礎音系研究」と題する論考を『民族語文』2012年第6期に発表し、『華夷訳語』の漢字音訳が北方官話とりわけ北京口語音を基礎としたという説を展開している。ブルグド氏はこれまでも、『華夷訳語』と同様の漢字音訳法を用いる『元朝秘史』について北方音説を述べたことがあり(cf.ブルグド 2009)、それを私が論評したこともある(cf.中村 2009)。今回の最新論文では中村 2007 の検討にかなりのスペースが割かれているので、これに応える義務があろうかと考え、本稿をなす次第である。なお、ブルグド氏の名前の表記は多様であるが¹、ここでは「ブルグド」で統一させて頂きたい。

2. 要点

まず、ブルグド 2009 の主たる論拠と、中村 2007;2009 の主たる論拠について、簡単に記しておきたい。『華夷訳語』の漢字音訳が北京口語音を基礎としているとブルグド氏が考える論拠は、モンゴル語/kei/を表すのに「克」を、/jei, jai/に「澤」を、/bei, bai/に「伯」を用いるのが北京語の口語音に相当する音形であり、いわゆる文白異読の現象が見られるというものである。中村 2007;2009 では、この「克」「澤」「伯」の三字について、例外的に元代の伝統的な音訳字(北京音による)を用いたものと見なし、全体の体系を論じる根拠とすることはできないとした。

一方、中村の論拠は、「哥」「可」など果摂一等字の扱いにある。すなわち、元代の音訳では開口と合口を区別し、開口字(「哥」「可」など)をモンゴル語の/ge/, /ke/に用い、合口字(「菓」「課」など)を/gö/, /kō/に用いる傾向が顕著であるのに対して、『華夷訳語』では開口字と合口字を区別せず、ともに/gö/, /kō/のみを表す。元代の音訳は開口[-ɣ]と合口[-uo]を区別する北京音に基づき、明初の『華夷訳語』の音訳は開口と合口を区別せずに[-o]とする南京音に拠ったと考えれば、この状況をうまく説明できる。これに対して、ブルグド氏は布日古徳 2012 において、開口字が必ずしも/ge/, /ke/のような/-e/のみに充てられていないことを強調している。

3. 「克」「澤」「伯」について

『華夷訳語』の漢字音訳について、その中に北京語の口語音に相当する音形が用いられていることを根拠に北方音説を唱えたのは更科慎一 2007 である。中村 2007 は直接にはこの更科論文に反応したものであった。ブルグド氏の最新論文において論拠とした「克」「澤」「伯」も

¹ カタカナでは、「ブリグド」または「ブルグド」、漢字表記は「布日古徳」、ローマ字表記は「BURIGUDE」または「Kereyidjin D. BÜRGÜD」である。

すでに更科論文で扱われたものである。したがって、それについての反論も中村 2007 ですすでに述べたことの繰り返しにならざるを得ない。

「克」「澤」「伯」の三字が『華夷訳語』の音訳者自身の体系に基づくものであるならば、その音訳者の言語は「克」「澤」「伯」の韻母を/-ai/, /-ai/タイプの二重母音で発音していた北京語などの北方方言ということになる。しかし、そう考えるには、この三字は全体の体系からあまりにも孤立している²。例えば、「格」「客」「赫」「額」はモンゴル語/ge/, /ke/, /he/, /e/に充てられているが、これを『蒙古字韻』で確認されるような北方音の/-iai/型の韻母で解釈するのはかなり苦しく、南京音/-əɣ/に基づくとする方が無理がない。また、これを現代北京音に見られるような、いわゆる文語音(韻母として/-ə/を持つ)で解釈しようとしても、そのような文語音の音形は16世紀初頭の崔世珍による『老乞大』『朴通事』のハングル注音(右側音)に至って初めて体系的に確認されるもので、15世紀以前の資料には見えない。『蒙古字韻』のパスパ文字表記でも、『洪武正韻訳訓』のハングルによる俗音表記でも、記されているのは口語音の音形のみであり、14世紀の段階で北京語に体系的な文語音が存在したという想定は空論でしかない。

それではなぜ「克」「澤」「伯」の三字が南京音に拠らず、北京音に拠っているのか。それはおそらく、南京音には[-ei]という二重母音が存在しなかったからであろう。そのため、モンゴル語/kei/, /jei, jai/, /bei, bai/を表すのに、元代にすでに定着していた「克」「澤」「伯」を借りて、専用の音訳字としたのである。/kei/は南京音を用いては一文字で表しえない音節であり、『至元訳語』にも見える「克」を借りたもの、後二者については、男性母音の/jai/, /bai/に対応する非入声字を用いる選択肢も可能であったが、「澤」「伯」が元代を通じて非常になじみのある音訳字(それぞれ皇帝名「完澤篤(öljeitü)」、人名「伯顔(bayan)」に用いられた)であったために、これを借りたものと考えられる。

4. 果摂一等字の問題

まず、「哥」「可」などの果摂一等字がなぜ基礎方言の判断基準になるのかという点を確認しておきたい。従来の研究では、元明代における果摂一等字開口字の韻母を[-o]~[-ə]と考えるのが一般的であった。これは南京官話の研究が未熟であった時代、つまり北京語と南京官話の区別を意識せずに研究していた時代の学説であるが、現在でもそれに従う研究者は多い。

これに対して、「哥」「可」などが元代には円唇母音ではなく、[-ə]のような中舌母音であったという説を立てたのが長田夏樹 1953 である。明初の『華夷訳語』『元朝秘史』では「哥」「可」などが円唇母音をもつ/gö/, /kō/に充てられるのに対して、『至元訳語』など元代のモンゴル語漢字音訳では/ge/, /ke/に充てられることを根拠にしている。吉池孝一 2005 は、この長田説を再

² 更科 2009 では、二重母音の表記に入声字が用いられる例として五字種を挙げている。上に挙げた三字以外に「勺」と「拍」があるが、後者は音の対応から見て「伯」の誤字であろう。前者の「勺」はほとんどが/jo~jō/に充てられており、一例のみ「勺温(mo.jegün“針”）」とあるのを更科氏は二重母音的表記と見なした。この一例のみが例外である上、当時の口語で第一音節が逆進同化により/jjōn/のように円唇化していた可能性を排除できない。

評価しつつ、元代碑文における音訳例を追加して、元代のモンゴル語漢字音訳が明初の音訳とは漢語の基礎方言を異にする可能性に言及した。それを受けて、中村 2006 では、元代の漢字音訳が主に北京音を基礎とし、明初の音訳が南京音を基礎としたことを述べた。

布日古徳 2012 では、果撰一等開口字の音訳例を基礎方言の識別に用いることはできないとする。その根拠は、①『至元訳語』において「哥」「可」がモンゴル語の/ge/、/ke/だけでなく、/gö/、/kö/にも用いられること、②『至元訳語』において「多」「那」が/do/、/no/を表すこと、③『元朝秘史』の全音訳字 570 字余りのうち、果撰一等開口字はわずか 11 字で、全体の 3%も及ばないこと、④音訳字「阿」が『華夷訳語』と『元朝秘史』でモンゴル語の/a/を表し、円唇母音を表していないこと、などである。

ブルグド氏の挙げた根拠のうち、有効なのは①の指摘のみである。②については、「多」「那」を開口字の例として挙げるのは適切ではない。元代の北方方言においては、中古の果撰一等開口字のうち、舌歯音字はすでに合口化している。このことは『中原音韻』によって明らかであり、ブルグド氏も参考にしている楊耐思 1981 の再構音でも「多」「那」はそれぞれ[tuo][nuo]と合口である。したがって、『至元訳語』においてそれらが/do/、/no/を表すのはごく自然なことであり、反論として意味をなさない。中村 2007 では、果撰一等に関しては開合の対立のある牙喉音字のみを問題にしている。

③については、わざわざ音訳字の種類が多い『元朝秘史』を引き合いに出して、果撰一等開口字がわずかな割合(3%は 2%の誤りであろう)に過ぎないことを述べているが、数ではなく質が問題である。果撰一等において、北京では開口と合口に明瞭な違いがあり、南京では区別がなかったと考えられることが基礎方言問題に大きく関わっている。数だけを問題にするならば、「克」「澤」「伯」のわずか三文字のみによって基礎方言を論じるのもかなり危険であるが、これも質の問題と解釈されたのであろう。

④は無意味な指摘である。「阿」は由緒正しい字音(「曲学阿世」「阿諛迎合」などの「阿」とは別に、外国語の[a]を表す音訳字として元代以降一貫して用いられた。そのような音訳の際に用いる特殊音は、基礎方言の問題とは別個に論じられなければならない。³

以上のように、②③④の三点については反論として効力を持たないが、①についての指摘は意味のあるものなので、それについて述べたい。『至元訳語』における「哥」と「可」は、「愛赤哥(mo.ecige“父”」「忽魯哥(mo.körge“鼓”」「別可(mo.beke“墨”」「阿可(mo.eke“母”」)などのように、「哥」をモンゴル語/ge/に、「可」を/ke/に充てるのを原則とするが、ほかに「素不児哥(mo.suburya(n)“塔”」)のように「哥」をモンゴル語/ga/に充てたように見える例、さらにはブルグド氏が指摘する「哥羅干(mo.gölögen“小狗兒”」「可可(mo.köke“青”」)のように「哥」と「可」をそれぞれモンゴル語の/gö/と/kö/に対応させた例も散見する。

このように『至元訳語』において、「哥」「可」がモンゴル語の/-e/に充てられるのを原則としつ

³ 『至元訳語』においては、「阿」は「阿可(mo.eke“母”)」と「阿合(mo.aqa“哥哥”)」のようにモンゴル語/e/と/a/の双方に用いられる。前者は「阿」の本来の字音/a/により、後者は音訳用の特殊音/a/によったもの。なお、『華夷訳語』『元朝秘史』において、「哈」「中合」がそれぞれ[ha][ga~qa]を表すのも、「合」が元代にすでに本来の字音/hə/のほかに、音訳用の特殊音/ha/を持っていたことによる。cf.中村 2010.

つも、/a/や/ö/にも用いられたのは、元代北京音における果摂一等牙喉音開口の韻母が中舌的な母音/a/ (実際の音価は[x]か)であったからと考えるのが妥当である。その母音の性格のために、モンゴル語の/e/の他にまれに/ö/や語末の/a/にも用いられたということであろう。吉池2005で指摘されたように、公的性格の強い聖旨碑文における使用例を見ても、元代のモンゴル語漢字音訳において「哥」「可」が/ge/、/ke/を表したという趨勢を否定することはできず、元代北京音において「哥」「可」が非円唇の韻母をもつ/ka/、/k'a/であったという前提に立たなければ、状況の説明は困難である。一方、『華夷訳語』では「哥」「可」を含めた果摂一等字が、開口と合口の区別なく全てモンゴル語の/gö/、/kö/を表しており、元代の音訳とは漢語の基礎方言を異にしたと考えるに十分である。

5. まとめ

モンゴル語漢字音訳において、「哥」「可」など果摂一等開口字の用法が元代と明初とで異なるとした長田1953の指摘は、今なお十分に理解されていないようである。元明の対音資料を扱う者は、なによりもまず長田1953を出発点とすべきであろう。

文白異読についても熟慮が必要である。現代北京語には旧入声字において体系的な文白異読が見られるが、それは16世紀以降の資料にしか確認できない。『蒙古字韻』や『洪武正韻訳訓』などの対音資料に文語音が全く見えない以上、『中原音韻』に見られる部分的な文白異読も北京語のものとは判断しにくい(cf.中村2011)。ましてや『中原音韻』においてさえ確認できない文語音を明初およびそれ以前に想定するのは、方法論として無効であろう。

「哥」「可」などをモンゴル語/gö/、/kö/に用い、「格」「客」「赫」「額」をモンゴル語/ge/、/ke/、/he/、/e/に用いるような音訳法から見て、『華夷訳語』や『元朝秘史』など明初の漢字音訳は南京音を基礎方言としたと考えるのが最も穏当である。

< 参照論文 >

長田夏樹1953「元代の中・蒙對譯語彙『至元譯語』『神戶外大論叢』4-2/3 (『長田夏樹論述集(上)』所収, 京都:ナカニシヤ出版2000.)

更科慎一2007「甲種本『華夷訳語』音訳漢字の基礎方言の問題」『佐藤進教授還暦記念中国語学論集』東京:好文出版.

中村雅之2006「近世音資料における果摂一等の表記」39.

中村雅之2007「『華夷訳語(甲種)』漢字音訳の基礎方言」『KOTONOHA』53.

中村雅之2009「『元朝秘史』音訳漢字の基礎方言問題」『KOTONOHA』84.

中村雅之2010「葛・合などの元代北方音について」『KOTONOHA』91.

中村雅之2011「北京語文白異読の形成過程について」『KOTONOHA百号記念論集』.

ブルグド2009「『元朝秘史』の漢字音の基礎音系についてーモンゴル語のco/cö, jo/jöの表記に使われた漢字音を中心にー」『日本モンゴル学会紀要』39.

布日古徳2012「『華夷訳語』(甲種本)音訳漢字基礎音系研究」『民族語文』2012年第6期.

楊耐思1981『中原音韻音系』, 中国社会科学出版社.

吉池孝一2005「哥葛などの元代音について」『KOTONOHA』 36.